

総合的な学習における異文化理解教育

—外国で暮らしたことがあるお母さんとの交流を通して—

栗本 清美 (安城市立今池小学校)

中野 真志 (愛知教育大学生活科教育講座)

(2003年11月26日受理)

Education for Intercultural Understanding in Integrated Studies

Kiyomi KURIMOTO (Anjyo Imaike Elementary School)

Shinji NAKANO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

要約 我々は、平成14年度にボランティアグループ「アロエの会」の協力を得て、総合的な学習を行った。その目的は、学校や学級における外国籍の子ども、外国の文化的背景を持つ子どもに対する理解を深め、お互いに認め受け入れ、尊敬する意識や態度を形成することを視野に入れながら、「外国の文化や生活を学習し国際的な視野を広げること」、さらに「異文化学習を通して自己理解と他者理解を深めること」であった。本小論は、そのような総合的な学習における異文化理解教育の実践研究である。

Keywords : 総合的な学習、異文化理解、異文化共生

1 はじめに

豊かな国際感覚を育てるために、今池小学校では、平成4年度から国際理解教育を推進している。その実践は、「異文化を理解し共に生きる」というねらいのもと、「触れ、慣れ、親しむ」をテーマに、外国の人との交流会を中心にしてスタートした。最初、その交流会は、学区の工場に研修生として来日していた外国の人を校内学芸会に招待することから始まった。

平成13年度から「総合的な学習の時間」のなかに国際交流を位置づけ、次のような目標や育てたい態度を明確にしている。

異文化理解に関するねらい	低学年	外国の人とふれあい、慣れる。	世界の人々と共生する
	中学年	外国や日本のことを調べ、共通点や相違点に気づく。	
	高学年	その国の国情を理解すると共に、日本人としての自分の生き方を考える	
育てたい態度	外国の人に対して、積極的にコミュニケーションしようとする態度		

この国際交流は、各学年において1年に10時間程度の時間内で、1、2年生については学校裁量の時間として設定している。各学年に1人から3人の外国の人にかかわってもらいながら、各学期に1度の国際交流を行っているのである。各学期毎に一度ではあるが、

1年生から6年生まで継続して行い、外国の人とのかかわりが深まるように配慮されている。

ところで、1974年に中央教育審議会は、国際社会を視野に入れて、各国民との友好関係を積極的に築いていく、国際性豊かな日本人の育成を学校教育の重要課題とした。これは、1974年のユネスコ勧告「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由について教育する勧告」を受けてのことであった。その後、広い視野を持ち、国際社会において主体的に生きる子どもを育成することは、学校教育の重要な目標の一つであり続けている。

しかし、国際理解教育が提唱された当初から、その概念をめぐっては「内なる国際化」が言われ、日本が文化多様性社会であることを認める必要があり、国内における異文化共生を目標とする教育、そしてユネスコ勧告の述べているように社会的マイノリティの人権に関する教育が重要であることが主張されてきた。

我々は、平成14年度にボランティアグループ「アロエの会」の協力を得て総合的な学習を行った。その目的は、学校や学級における外国籍の子ども、外国の文化的背景を持つ子どもに対する理解を深め、お互いに認め受け入れ、尊敬する意識や態度を形成することを視野に入れながら、「外国の文化や生活を学習し国際的な視野を広げること」、さらに「異文化学習を通して、自己理解と他者理解の能力を深めること」であった。

本小論は、そのような「異文化共生」「社会的マイノリティの人権」に関する教育を視野に入れた総合的な学習における異文化理解教育の実践研究である。もちろん、この研究課題は、短期間で成せるものではなく、

理論的にも実践的にも長期的・継続的に取り組まなければならない重要な課題である。従って、本小論は、現時点での我々の研究成果に関する論稿であり、今後とも研究を継続・発展させたいと考えている。

II 実践研究の構想

今は、町の中の様々な場所で、外国の人と接することが多くなってきた。しかし、外国の人を目にしても積極的にかかわっていきこうとしない人が多いように思われる。本学級にもブラジル人の子がいるが、日本人の子は、言葉が分からないので自分から話しかけられないし、面倒そうだからあまり近寄らない。そんな子どもたちに、外国への興味や関心を持たせ、言葉が分からなくても話しかけることのできる自信をつけさせたい、外国のことをもっと知りたいと思う気持ちを持ち、外国の人に積極的にかかわっていきこうとする態度を養いたい、そして、世界中の人々が互いに助け合ってお互いを尊重しながら生活していきこうとする意識と態度を養いたいと考えた（単元構想図は図1参照）。

そこで、外国で暮らしたことがあるお母さんたちのボランティアグループ「アロエの会」に協力をお願いし、外国での生活の様子を子どもたちに伝えていただくことにした。日本人のお母さん方なので、外国の生活の様子を日本語で詳しく話していただくことができ、外国生活をより身近なこととして実感させられると考えた。また、外国での暮らしを想像しやすいようにできるだけ体験を取り入れた活動を進めていくことにした。「アロエの会」の方や外国の方と、直接話をして、自分が興味をもったことを自分で調べることが、外国への興味や関心を持続させることにつながるだろう。そして、子どもたちにとって異文化を知ることが日本での生活を見直し、自分を見つめ、外国の方の気持ちをも知ることにつながると推測し、以下のような仮説と手だてを考えた。

1. 実践研究の仮説

- (1) 世界のいろいろな国の言葉や生活様式、文化の違いなどを知ることにより、世界中に住む人々に目を向け、興味・関心を持つことができるであろう。
- (2) 外国の人と直接話をすることによって、生の外国の文化に触れることができ、日本と外国、日本人と外国人の共通点や相違点に気づくことができるであろう。

2. 実践研究の手だて

- (1) もっと知りたい、自分でも調べてみたいという意欲を子どもたちが持つことができるように、外国での生活の様子を「アロエの会」の人から直接聞く機会を多くする。
- (2) より深い追求をするために、追求活動を多面的に評価したり、友達、保護者、外国の人など、いろいろ

な人に発信する場を設定する。

- (3) 外国の生活をより身近に感じることができるよう、外国の人と直接交流し、話をする機会を持つ。
- (4) 外国で暮らすことの大変さや難しさを理解するために、日本で暮らす外国の人の気持ちを直接聞く場を設定する。

III 実践の概要

1. 自分の知らない国に興味を持ち始める子どもたち

「アロエの会」の方たちの協力を得て、外国での生活の様子を話していただいた。初めての出会いの時、子どもたちには何も告げず、英語で自己紹介をしていただいた。日本人のお母さんが急に英語を話し出したので、驚いて注目した。話を聞くだけでなく、アメリカで生活していた時の写真も見せていただいた。大きなショッピングセンターの話や学校の中に食堂があって、自分の好きなお菓子を買うこともできるという話に引きつけられ、日本とは違う外国の生活に興味を持ち始めた。

2回目の交流会



2回目には、3人のお母さん方に来ていただくことができた。紹介だけのつもりであったが、みんなで楽しみたいからと行って、ハローウィンのカボチャの顔を使って、日本の福笑いのようなゲームを行った。子どもたちはとても喜び、次はどんな楽しいことがあるのだろうと次回を心待ちにしていた。

3回目の交流会



活動の構想 (110時間)



3回目には、6人のお母さん方に来ていただき、子どもたちも6つのグループに分かれて交流をした。インドネシアやフィリピンのお金を見せていただいたり、地球儀で場所を確かめたりしながらお話を聞いた。フィリピンのピナツボ火山の噴火直後にボランティア活動をされたお母さんは、その時の様子を紙芝居で教えて下さった。山で暮らせなくなった先住民族が町で生活し、差別をされた話は、その後の子どもたちの追求活動に大きな影響を与えた。こうして世界中のいろいろな国に分かれて個人で追求を始めた。「アロエの会」のお母さん方には、定期的に学校に来ていただき、子どもたちの追求に刺激を与えていただくことができた。世界の三大穀物を子どもたちに紹介したいからと言って、小麦(サンドウィッチ)トウモロコシ(タコス)、米(インドネシアのタマネギのふりかけをかけたもので、手で食べた)を試食させて下さったり、言葉が話せなかったらどうやって暮らすのかを経験させるために日常会話をジェスチャーでみんなに伝えるゲームをしたりした。

また、日本で暮らしているブラジル人の友達の気持ちを理解させるために、言葉の分からない国で生きていくために必要最低限の言葉は何かをグループ毎に話し合った。その時、アロエの会の方は、グループ活動に参加し、意見をまとめて下さっていた。ブラジル人の友達にクラスみんなの目を向けさせたいからと言って、その時に選んだ言葉をブラジル人の子にポルトガル語では何と言うのかを教えてもらおうという提案もしてくださった。日本語、英語、ポルトガル語の並ぶ単語カードができた。ブラジル人の子がみんなから話しかけられ、授業の中心となることができた。

「アロエの会」のお母さん方は、どうしたら子どもたちが喜んでくれるのか、どうしたら異文化での生活をよく理解してくれるのかを真剣に考え、いろいろな提案をしてくださった。また、自分のお子さんが外国の学校で苦勞したことを身をもって経験しているので、クラスにいるブラジル人の子どもに対して特別の思いがあるように感じた。

「アロエの会」のお母さん方との様々な交流を通して、子どもたちは、生き生きとした経験をする事ができた。そして、外国の生活が日本と違うことに気づき、いろいろな国の生活について興味を持ち始めた。

2. 自己評価、相互評価、外部評価をしながら、個の追求を深める。

子どもたちは、自分が調べてみたい国を決定し、追求を始めた。自分でテーマを決定し、自分の力で追求させるために、個別に追求活動させた。アメリカのマクドナルドについて調べようとする子や貧しくて働かなくてはいけないというバングラデシュの子どもたちについて調べる子、アマゾンの動物たちについて調べる子など様々であった。ピナツボ火山の紙芝居が心に

残り、先住民族や南アフリカのアパルトヘイトについて調べる子も多く現れた。調べるのが楽しくなってきた、本やインターネットなどで次々に追求を進めていくことのできる子もいるが、何を調べるのかさえなかなか決められない子もいた。

子どもたちが追求活動を始めるときに、自己評価の手段としての「わくわくタイム学習アイテム」について説明をした。自分が今から調べ学習をしながら、どんな力をつけていこうとしているのかを知っていることにより、活動に対する取り組み方が違ってくると考えたからである。

わくわくタイム学習アイテム

わくわくタイム学習アイテム		名前
① 目的アイテム	自分の目標・めあてをもって活動することができたか。	◎
② 学びのアイテム	家族をもって、一生懸命しらべることができましたか。	◎
③ 調べ方アイテム	調べ方を自分で工夫しましたか。	○
④ 家とめ方アイテム	調べたことをみんなに説明もって書きますか。	○
⑤ 発表アイテム	調べたことをまとめるまで、みんなに分かるように工夫して書きましたか。どんな工夫か、みんなに説明もって書きますか。	◎
⑥ 友達アイテム	仲間(調べたり、家とめたり)して、新しいことに気づいたり、分かったり、書いたり、思ったりしたことがありましたか。	◎
⑦ 友達アイテム	仲間して手伝うことを覚えて、自分で何か説明して来たことや書かして来たことがありましたか。	△
⑧ 友達アイテム	友達と協力して調べたり、友達の考えや意見をしっかりと聞いて、それを生かしましたか。	◎

よりかえって
オーストラリアについてのっている本や、ホームページとかがなくて、言周べるのは大変だった。でも、言周べたことをまとめると、たくさんあったので、すごくうれしかったです。言周べている時は、すごく楽しかったです。

いやりたいこと
・みんなから質問されたことや、自分で言周べてみたいことを調べたい。
オーストラリアのことか、いろいろあるって思った。

追求には個人差があり、個々への支援が必要であった。そこで、毎時間「わくわくタイムふりかえりカード」に記入させ、子どもの悩みや追求の進み具合をチェックした。それによって、子どもたち一人ひとりの追求活動を知り、個に応じた支援に役立てることができた。

わくわくタイムふりかえりカード

わくわくタイムふりかえりカード
名前

9/6 アメリカの子
しが言周べた
Tadashi...
Ariana...
...

9/6 アメリカの子
辺等々ののって
る本を見つけた
Tadashi...
Ariana...
...

9/11 アメリカの子
ででんりりません
をしたでそ
という4を見つけた
Tadashi...
Ariana...
...

今日の活動についてよりかえってあげよう。聞いていることがあったら、書きましよう。

調べ方が分からない子もそれなりに努力をしていて、どの子も中間発表会で自信をもって発表できるだけの成果を得ることができた。追求後に「わくわくタイム学習アイテム」について自己評価をさせたが、ほとんどの子が○をつけていた。また、自分で実践アイテムが弱いことを見つけて、外国人へのインタビューや外国の料理作りなど、意欲的に活動する子も現れた。

学級を四つのグループに分け、中間発表会を行った。司会者と時計係を決めて、会を進行させた。中間発表会では、調べたことを短冊にまとめさせ、原稿なしで発表させた。一人で発表をするので、友達に頼ることができない。そのため、自主的に発表の練習をして、緊張感をもって、会に臨むことができた。

学級での中間発表



各グループに「アロエの会」のお母さんに参観していただき、評価をしていただいた。アロエの会の方による外部評価は、子どもたちにより緊張感を持たせることができた。また、教師の評価をより公正にすることができた。

子どもによる相互評価

オーストラリア について調べている

質問します。
アドバイスします。
感想を言います。

本当にアロエの会は3人くらい、
あるんですか？オーストラリアにはどんな食事
はどんなものがあるんですか？
分かりました。です。

オーストラリア について調べてい

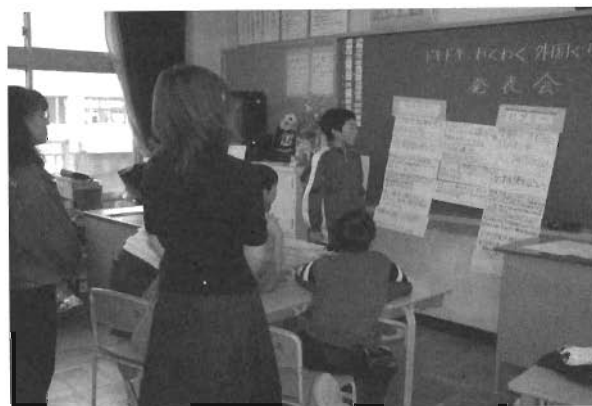
質問します。
アドバイスします。
感想を言います。

説明がすごく上手。質問の答え方が上手。
アドバイスは、長い紙の内容が見えないので
見せる方が良さそう。

さらに、子どもたちによる相互評価も取り入れた。子どもたちが、発表を聞いて友達にメッセージカードを書くのである。発表の仕方や内容について友達から評価され、次の追求活動に意欲を持った子が多かった。心に思っても口に出せない子や、後からでは忘れてしまう子も、友達に自分の意見を伝えることができた。

また、授業参観では保護者に向けてポスターセッションを行った。大人は、初めて聞く内容にも質問などをしてくれるので、張り切って発表をすることができた。そして、中間発表会でうまく発表できなかったところについて調べ直し、練習してあるので、自信を持って発表をしていた。

授業参観での中間発表



中間発表会でアフリカに住む先住民族のピグミー族について発表した子は、寒い国の先住民族エスキモー族についても興味を持ち、生活を比べてみたいと思うようになった。短い期間にもかかわらずよく調べて、授業参観では、二つの民族を比べながら発表をすることができた。

3. 国際交流により、生の外国文化に触れる

1回目は、インドネシアの留学生の方と交流することができた。全員で、インドネシアの生活について手分けして調べた。それを発表しながら、さらに詳しく教えていただいたり、間違っていることを指摘していただいたりした。インドネシアの国旗やスポーツ、言葉や食事などについて詳しく聞くことができた。

インドネシアの歌を調べた子がオルガンを弾き、みんなで歌うと留学生の方も知っている歌だからといって、一緒に歌ってくださった。また、インドネシアの遊びをインターネットで調べたが、遊び方がよく分からなかった。しかし、留学生の方に一緒にやっていたらと遊び方だけでなくおもしろさ分かるようになった。その後もしばらくその遊びが流行し、放課に運動場で行っていた。留学生の方から安全で豊かだから、日本に留学することにした。母国に帰ったら、大学の先生になるつもりである。日本語の本で大学の勉強をするのはとても大変であるという話を聞いた。子どもたちは、外国に行って、その国の言葉で勉強することの大変さを感じたようであった。

インドネシアの留学生との交流



2回目は、バングラデシュの留学生の方と交流することができた。バングラデシュとインドの国について調べた子が会を進めていった。子どもたちが用意したカレーの材料を煮込んで、バングラデシュの方にスパイスで味付けしていただいた。その間に、バングラデシュの生活について発表を行った。

自分たちが調べたことについて感想や意見を話していただいた。すると、資料が古かったり、同じ国でも都心と田舎では違うことが分かった。本やビデオなどの資料を鵜呑みにしてはいけないことが分かった。

また、留学生の方が日本に来ることになった経緯や日本での生活の様子、日本で暮らしてみte感じたことなど、本では分からないお話を聞くことができた。今も家事をしながら勉強を続けているという話を聞き、大変驚いた。

当日は、「アロエの会」の方や保護者の方にも参加をしていただくことができた。お母さん方も子育てをしながら大学院で勉強を続けていることについてや女性の地位の向上について研究していることに関心をもたれていた。また、カレーの作り方やスパイスについて質問されるお母さんもいて、みんなで鍋をのぞき込みながら、楽しい時間を過ごすことができた。



短期留学生たちとの交流

3回目は、日本に1年だけの短期留学をしている各国の先生方と交流をすることができた。韓国2名、フィリピン1名、ミャンマー1名、ベネズエラ1名、インドネシア1名、メキシコ1名、ブラジル1名の8名の方を迎えることができ、子どもたちは大変喜んだ。今までの学習を生かして、子どもたちに外国の方とできるだけ多く話をさせたかったので、子どもを8つのグループに分け、外国人の方1名と子ども3~5名という少人数で1時間話をさせた。子どもたちは、今まで自分が調べてきた国や日本と比べながら、学校や食事についてなど具体的に話を進めていった。1時間があつと言う間に過ぎ、別れを惜しんでいた。自分で直接、外国人の方と話ができたので、興奮気味であった。「国にもどったら、二度と日本に来ることはできない。」と言われる方もあり、外国から日本に来ることはまだまだ大変なことだと感じた。

4. 多様な学習記録から自己を見つめ直す

今年度、学習をしたことを自分の思い出作りとして、本にまとめた。多くの活動の中から、自分が残しておきたいと思う活動を選ばせた。友達や保護者に発表をして、自分の追求活動を多くの人に認めてもらったが、自分の成果として形に残るものがほしいと考えた。調べたことだけでなく、いろいろな活動の記録写真を切り抜いて貼ったり、感想文を入れたりした。交流した方の写真は良い思い出となり、自分の授業での様子を振り返ることができた。

様々な学習記録



文集での子供の感想文

ぼくは、先住民族という言葉を知りませんでした。最初はT君から先住民族のアイヌというのを教えてもらいました。そこから先住民族に興味が出てきました。それで、ピグミーという先住民族を調べることにしました。最初は、知らなかったことが分ると、何でも紙に書きました。一番びっくりしたのは、身長が1.5メートルしかないということでした。それから、いろいろ調べ、中間発

IV おわりに

表の時、うまく発表できませんでしたが、それが終わると、エスキモーを調べました。少し工夫して、ピグミーと比べることにしました。エスキモーは、知恵がありました。学校もあり、狩では全長18メートルのクジラでもとることができます。

他の国のことも発表を聞いて知りました。バングラデシュは、すごくまずしくて、かわいそうだと思います。日本はかならず学校に行けるのに、バングラデシュでは行けない子が多いです。大人でも読み書きできない人がいるなんて、日本では信じられません。国土の三分の一が洪水になります。お金がないのに、洪水で家が流されるなんて、かわいそうだと思います。(H.F.)

ほくは、外国の言葉を調べて本を作りました。本の内容は、今池小の行事にしました。自然教室、学芸会、運動会などの行事にしました。行事の様子を写真にとり、せつ明を外国語にしました。言葉は、アロエの会の人たちなどから聞きました。発表会でお母さんや友達に発表しました。おもしろかったです。(K.S.)

ほくは、ドイツのことを調べました。最初は、学校のことを調べました。校舎にトイレがないと知って、いやだなと思いました。8時15分に学校が始まります。学校が午前中で終わるので、いいと思いました。次に、物のことを調べました。ドイツ人は、物を大事にします。ほくは、物を整理するのが苦手なので、いやだと思いました。ほとんどの家には、地下室があります。食品などが入っています。ほくの家にも地下室があるといいな、と何となく思いました。まどやドアの近くに花などをたくさん飾ります。他にもいろいろなことを調べました。一度、ドイツに行ってみたいと思いました。(S.O)

ブッシュマンについて調べ、すごいと思ったことは、自分たちが動物や植物をとって、それを食べて生活しているということです。ブッシュマンの主要な植物は、モンゴッコ・ナッツとツアマメロンです。大型の動物のとり方は、弓と毒をぬった矢を使います。毒はカブトムシの幼虫を使います。ほくは、そういうふうにして食べ物をとって食べているのがすごいと思います。ブッシュマンの狩の仕方や食べ物のことなど、ぜんぜん知らなかったことがたくさん分かって、よかったと思います。(R.K.)

国際交流3回目で、日本語をあまり話すことができない人たちと交流をする機会をもった。子どもたちは、外国の人を前にしても意欲的に話をすることができた。話が途切れたり、教師の助けを必要とするこもなく、子どもたちだけで交流をすることができた。ジェスチャーや片言の英語で伝えたり、紙に絵を描いて説明したりしていた。

平成14年度始めに「外国人の人に声をかけることができますか?」というアンケートをとったとき、「はい」という子は9人であったが、2月には15人になっていた。

子どもたちは、本実践で、世界にいろいろな国、いろいろな民族や文化、そして、いろいろな生活があることを学んだ。そして、日本とは異なる文化や生活を持っているが、どの国の人たちも自分たちと同じ感情を持った人間であることがわかってきたのではないか。だから、話しかけることに不安がなくなってきたように思われる。言葉が通じれば、どの国の人とも話してみたいという、外国に対する興味や関心が高まってきた。自分が調べたことが本当か、外国まで確かめに行きたいと言う子や物価が安いから将来中国に住むのもいいなと言う子も現れ、もっと調べてみたいという子どもたちの追求意欲は高まっている。

さらに、子どもたちは、外国のことを調べながら、無意識に日本と比較をしている。日本と同じか、日本と違っているかという基準である。そうするうちに、それぞれの国の良いところが見えてきた。日本の生活しか知らない子どもたちが、外の世界に目を向けはじめたのである。先進国と発展途上国、それぞれに良いところや悪いところがあることがわかった。

自分たちは日本に住み、日本が一番好きだと思っているが、外国の人たちもそれぞれに自分の国が一番好きであることもわかった。また、言葉は違っても人間は同じようにうれしい気持ちや悲しい気持ちを持っていることがわかかってきた。外国の人だから違うのではなくて、みんな同じ人間であることもわかかってきた。

子どもたちは、本実践を終えて、いろいろな国に興味や関心を持つことができたのだが、そこに問題を見つけたり、問題を解決するために積極的に行動しようとする子が現れなかった。世界中に目が向いてしまい、焦点を絞ることができなかつたためである。学級全員で世界に向けて発信ができるような取り組みをしようと、子どもたちにより高い達成感を持たせることができると思う。今後、子どもが問題意識を持って、世界を見つめ、自分にできることから行動を起こしていけるように発展をさせることができると良いと思う。

また、学級にいる外国人の子どもたちをできるだけ総合学習の授業で取り上げるようにした。しかし、日

本人の子どもたちの気持ちの中に「あの子は外国人だから自分たちと一緒にできなくても仕方がない。放っておかれても仕方がない・・・」という気持ちがあり、一方、外国人の子どもは日本語がうまく話せなくて、「一緒にやりたい。私も仲間に入れてほしい。」という自分の気持ちをうまく伝えることができなかった。仲良くしてはいるのだけれど、何となく溝が感じられる。

日本の学校教育において、学校および学級の「異文化共生」、「内なる国際化」が極めて重要な実践的課題、理論的課題である。その重要性は、今後ますます、強まっていくであろう。

<参考文献>

中野真志、松本美登志、池田比呂子編著『教え合い学び合う』学文社、2002年

木下百合子「Eメール交換をとおした異文化間学習」『教育法方法学研究』第28巻、日本教育方法学会、2003年、141から152頁。

加藤幸次・安藤輝次著『総合学習のためのポートフォリオ評価』黎明書房、1999年。

安藤輝次『ポートフォリオで総合的な学習を創る』図書文化、2000年

付記

本小論は、平成14年度安城市派遣研究生としての研究論文を加筆・修正しまとめたものである。また、本実践に協力して下さった「アロエの会」の皆様には厚く御礼申し上げたい。